

研究活動報告

言語コミュニケーション教育の研究と開発プロジェクトの活動

1 プロジェクトの前提

平成16年度の島根大学教育学部の改組に伴って、研究組織としての言語文化教育講座が新設された。従来の国語教育と英語教育の専門教員を中心として、新時代に対応した言語文化教育を推進・開発する新体制である。

当時の所属教員によって、平成16年度には、新講座に相応しい共同研究のテーマや体制について検討されたが、国語と英語の融合は本学部では前例のないことでもあり、具体化には至らなかった。また、新制度の学生が1年次のみであることも共同研究が本格化しなかった一因にもなったとも考えられる。

平成17年4月になって、「学校教育実習Ⅱにおける国語・英語共同プログラムの研究開発」と「言語コミュニケーション論関連カリキュラムの共同開発」とを新講座の中心的共同研究に定めることができた。前者は、新学部の強化された教育実習をより効果的なものとするために、附属中学校の国語科・英語科教員との連携のもとに、国語・英語の交流・相補を試みるものである。後者は、国語・英語の両専攻学生に共通の必修3科目（「日英対照言語学」「日本語表現論」「異文化の交流と理解」）のあり方を言語コミュニケーションの面から検討・開発するものである。

これは、学部の国語、英語、附属中学校の3者が合流する斬新な発想であり、学部改組の進展に貢献できると予想されたが、この時点では既存の体制の3・4年次生の指導にも大きな責任があり、新旧両組織の両立に重点が置かれ、新体制として目立った成果を残したとは言い難い（学部長裁量経費不採択）。

2 プロジェクトの概要

平成18年度より、共同研究「言語コミュニケーション教育の研究と開発—学部・附属の連携—」が実質的に進行する。初年度は、教育学部の国語・英語関係教員10名（言語文化教育講座9・初等教育開発講座1）と附属中学校の国語・英語担当教員6名（国語3・英語3）の16名で始動した。3年目の平成20年度からは、附属小学校の国語科教員3名が加わって19名の組織になり、小学校から大学までの16年間で視野に入るようになる。この年度からプロジェクト名称の副題を「大学・附属（小・中）の連携」に変更した。その後、教員の補充もあって、22年度には22名の研究組織が確立している（言語文化教育講座11、初等教育開発講座1、附属中学校7、附属小学校3）。

平成18年度から22年度まで継続的に学部長裁量経費を交付され、教材開発や共通資料確保などの面でも体制が整いつつある。

年度ごとの報告は、島根大学教育学部ホームページで公表した。

3 プロジェクトの目的

「言語コミュニケーション教育の研究と開発」プロジェクトは、島根大学の中期目標・中期計画に即応しつつ、次のように目的を設定している。

(1) 教員養成専門学部の理念と目標に基づいて誕生した言語文化教育講座は、新しい教育的課題に積極的に取り組み、学部と附属学校の連携による言語コミュニケーション教育を創案・開発・実行することを責務とする。本プロジェクトはその責務遂行を主目的とする。

(2) 研究組織としての新講座は、特性を生かした独自の研究体系を開発する必要がある。言語文化教育講座においては、英語・日本語の言語コミュニケーション能力を重視して広域的研究を進めている（教育・研究の実施体制、附属学校との連携、地域貢献などに関する中期目標・中期計画に照応している）。本プロジェクトはその一翼を担う。

(3) 学部・附属学校のより一層の連携を目的とする（中期目標・中期計画に対応）。

以上の(1)(2)(3)は、本学部の新体制とその方向性に合致する新課題であり、本講座の体験学修の基盤をも形成している。従来からの教育研究活動を維持しつつ各課題を解決するためには、独立プロジェクトの実動が必要不可欠となるからである。

4 研究活動

平成16年度から教師教育に特化する形で一新された島根大学教育学部に、「言語教育専攻」が誕生した。これは、教員組織である「言語文化教育講座」に直結する学生の所属先（主専攻）であり、国語教育コースと英語教育コースから成る。平成20年度には大学院教育学研究科が改組されて、教科内容開発専攻「言語系教育コース」が設置された。これは、学部の言語教育専攻に対応するもので、国語教育分野と英語教育分野とに分かれる。本プロジェクトは、このような学部・大学院の改組に連鎖して、次のような諸活動を行った。

① 新生「言語教育専攻」の共通必修になった「言語コミュニケーション論」3科目、「日英対照言語学」（縄田裕幸担当）・「日本語表現論」（三保忠夫・百留康晴担当）

・「異文化の交流と理解」（高瀬彰典担当）の教育方法や理念を有効化することをプロジェクトの基底に置くこととした。これを以下の各種活動と関係づけて、プロジェクト統一の根拠としている。

② 学部改組により重層化・高度化した教育実習を有効に活用するために、学部教員と附属学校教員との連携による「言語コミュニケーション教育の開発研究」を遂行している（「学校教育実習Ⅱにおける国語・英語共同プログラムの研究開発」など）。

なお、平成19年12月8日（土）に附属小学校国語科教員を招いての「教育実習等の報告・討議会」を開き、これを契機に翌20年度から附属小学校教員がプロジェクトに加わることとなった。これによる成果に、喜多川昭博「主人公の変容を叙述に沿ってとらえ、読みを深めていく子ども—3年「主人公の成長を読み取ろう『モチモチの木』の実践から—」、福田哲之「言語コミュニケーション教育の研究と開発—附属学校との連携—」などがある。

この段階で、学部と附属学校園の国語科関係教員の共同研究組織である「三土会」との研究協力体制が確立した。

③ 附属学校園の「幼—小—中」一貫教育構想に対応して、日本語と英語の言語能力の相補・連続的学習方法を、特に小・中9年間を対象に検討している。さらに、大学生のコミュニケーション能力や文章表現力の育成方法を開発・実践し、小学校から大学までの言語教育の一貫性・相関性を検証している。これらの成果は④の島根大学言語教育研究会研究発表会などで発表され、論議された。また、大学生のコミュニケーション能力開発については、「文章表現法講座」を継続的に実施し、社会人に相応しいコミュニケーション能力や文章表現力を育成し、同時にその過程で得られた事例を集積している（田中俊男を中心に進行中）。

④ 上の①②③の基盤組織として、「島根大学言語教育研究会」を平成20年度に創設し、研究発表会を開催している。

第1回 平成20年9月29日（月）

福田景道：教育学部国語専攻生の授業履修動向について—日本文学史Ⅰの授業改善の結果から—

第2回 平成21年2月10日（火）

大谷みどり：生徒・学生にとって必要なコミュニケーション能力とは

第3回 平成21年7月10日（金）

縄田裕幸：語学から見た「ことばの力」

第4回 平成21年9月11日（金）

田中俊男：「正しく美しい言葉」から遠く離れて—『新編新しい国語Ⅱ』

第5回 平成21年12月11日（金）

猫田英伸：新学習指導要領のポイント：初等、中等教育の連携の視点から

第6回 平成22年1月29日（金）

富安慎吾：ローマ字教育の現在

※「三土会」平成21年度研究発表会と合同開催

第7回 平成22年7月11日（金）

百留康晴：国語の授業と日本語文法

第8回 平成22年9月17日（金）

高田純子：文法意識を高めるインプットを与えることの効果について

第9回 平成22年10月8日（金）

林 高宣：論文指導と文法教育に関する一考察—until節に生起する動詞をめぐる—

第10回 平成22年11月18日（木）

福田哲之：「伝統的な言語文化」と書写教育—書体史研究から見えてくるもの—

※「三土会」平成22年度研究発表会と合同開催

以上、10回の研究発表会を開催した。

なお、島根大学言語教育研究会の詳細については、本誌に「島根大学言語教育研究会研究発表会開催記録（活動記録）」として掲載している。

⑤ 本プロジェクトの根幹的課題を明確化し、対応策を検討するために、公開講演会を実施した（築道明氏「小学校の英語活動を展望する」平成18年12月25日、大学会館大集会室。「世代間コミュニケーションと教育」プロジェクトとの共催）。

⑥ 新講座の新課題に対応するための資料を集積した（学部長裁量経費を主に使用した）。特に、中学校と高等学校の国語・英語・書写の全教科書を揃えたことで、研究の体制が整ったと言える。

⑦ プロジェクト全体の成果（特に②③④）に基づき、新資料（⑥など）を活用しつつ、新しい授業科目群「内容構成研究」の改善・開発を行っている。これらは、教科教育学と教科内容学との連携を目指すもので、本プロジェクトの趣旨との共通性が認められる。該当する授業は以下の8科目である。（ ）内に22年度の担当者名を示す。文法教材研究（百留康晴）、日本現代文学教材研究（田中俊男）、日本古典文学教材研究（福田景道）、漢字・漢文教材研究（竹田健二）、書写教材研究（福田哲之）、英語科教材研究Ⅰ（縄田裕幸）、英語科教材研究Ⅱ（林高宣）、英語科実践研究（猫田英伸）。前の5科目は2年次後期開講、後の3科目は3年次前期開講で、基礎的な「言語コミュニケーション論」3科目（①、1年次後期）の後を受けつぐ応用的なものと思なせる。

⑧ プロジェクトの成果の公表方法について、検討している。

国語教育関係の教員によって、島根大学公開講座で国語教育や国語教材に関する知見を公開し、本プロジェクトの成果も反映させている。

平成19年度：「国語」の世界を広げよう（5日間）

平成20年度：「国語」の世界を広げよう2（〃）

平成21年度：「国語」の最前線（6日間）

平成22年度：「国語」の新視点（7日間）

ただし、これは一般社会人対象なので、本プロジェクトの目的と十分に整合しない面がある。その点で、学部主催の「現職教員のためのパワーアップ講座」が、単年度の開催であったが、成果公表の場に相応しいものであ

ると考えられる。今後の検討を要する。

同講座は、当時の副学部長で本プロジェクトの構成員でもある福田哲之が主導して実現した企画で、国語・英語関係は以下のように開催された。担当者はすべて本プロジェクトの構成員で、対象は小学校と中学校の教員であった。

○平成21年11月29日（日）10：30～16：15

「小学校外国語活動と中学校英語科の連携」

第1時限 猫田英伸「新学習指導要領のポイント―初等・中等教育の連携の視点から―」

第2時限 大谷みどり「小学校外国語活動の実際―ワークショップ形式による英語活動―」

第3時限 縄田裕幸「小学校と中学校をつなぐ『ことばの力』」

○平成21年12月5日（日）10：30～16：15

「小・中学校における“伝統的な言語文化”教育」

第1時限 足立悦男「国語科新学習指導要領のポイント」、富安慎吾「小中学校で古典をどう教えるか―論語を例として―」

第2時限 福田景道「教材としての『かぐや姫』と『竹取物語』」

第3時限 フォーラム「“伝統的な言語文化”と国語教育」

平成18年度に始発した本プロジェクトは徐々に活動内容を改善・強化しながら5年目に入った。これまでの成果を総括し公表する段階に達したと判断し、『島根大学教育学部紀要』の別冊特集の編集を企画した。

5 研究組織

【平成18年度】

氏名	所属	専門分野
高瀬 彰典	言語文化教育講座	英 文 学
森山 善美	言語文化教育講座	英語教育学
三保 忠夫	言語文化教育講座	日 本 語 学
足立 悦男	言語文化教育講座	国語教育学
福田 景道	言語文化教育講座	国 文 学
福田 哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田 健二	言語文化教育講座	漢 文 学
林 高宣	言語文化教育講座	英 語 学
縄田 裕幸	言語文化教育講座	英 語 学
間瀬 茂夫	初等教育開発講座	国語教育学
湯浅 哲司	附属中学校	国語教育学
中釜 智子	附属中学校	英語教育学
渡部 睦浩	附属中学校	英語教育学
川井 史生	附属中学校	国語教育学
林原 公子	附属中学校	国語教育学
小澤 正則	附属中学校	英語教育学

【平成19年度】

氏名	所属	専門分野
森山 善美	言語文化教育講座	英語教育学
三保 忠夫	言語文化教育講座	日 本 語 学
足立 悦男	言語文化教育講座	国語教育学
高瀬 彰典	言語文化教育講座	英 文 学
福田 景道	言語文化教育講座	国 文 学
福田 哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田 健二	言語文化教育講座	漢 文 学
林 高宣	言語文化教育講座	英 語 学
縄田 裕幸	言語文化教育講座	英 語 学
田中 俊男	言語文化教育講座	国 文 学
湯浅 哲司	附属中学校	国語教育学
中釜 智子	附属中学校	英語教育学
川井 史生	附属中学校	国語教育学
林原 公子	附属中学校	国語教育学
小澤 正則	附属中学校	英語教育学
高田 純子	附属中学校	英語教育学

【平成20年度】

氏名	所属	専門分野
福田 景道	言語文化教育講座	国 文 学
森山 善美	言語文化教育講座	英語教育学
足立 悦男	言語文化教育講座	国語教育学
高瀬 彰典	言語文化教育講座	英 文 学
福田 哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田 健二	言語文化教育講座	漢 文 学
林 高宣	言語文化教育講座	英 語 学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
縄田 裕幸	言語文化教育講座	英 語 学
田中 俊男	言語文化教育講座	国 文 学
湯浅 哲司	附属中学校	国語教育学
中釜 智子	附属中学校	英語教育学
川井 史生	附属中学校	国語教育学
林原 公子	附属中学校	国語教育学
小澤 正則	附属中学校	英語教育学
高田 純子	附属中学校	英語教育学
金山 剛志	附属小学校	国語教育学
藤原 さり	附属小学校	国語教育学
喜多川昭博	附属小学校	国語教育学
研究協力者：富安慎吾（初等教育開発講座・国語教育学）、百留康晴（言語文化教育講座・日本語学）、中村紀恵（附属小学校・国語教育学）		

【平成21年度】

氏名	所属	専門分野
福田 景道	言語文化教育講座	日本文学
足立 悦男	言語文化教育講座	国語教育学
高瀬 彰典	言語文化教育講座	英文学
福田 哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田 健二	言語文化教育講座	漢文学
林 高宣	言語文化教育講座	英語学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
縄田 裕幸	言語文化教育講座	英語学
百留 康晴	言語文化教育講座	日本語学
田中 俊男	言語文化教育講座	日本文学
猫田 英伸	言語文化教育講座	英語教育学
富安 慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
湯浅 哲司	附属中学校	国語教育学
川井 史生	附属中学校	国語教育学
林原 公子	附属中学校	国語教育学
小澤 正則	附属中学校	英語教育学
高田 純子	附属中学校	英語教育学
須田 香織	附属中学校	英語教育学
藤原 さり	附属小学校	国語教育学
中村 紀恵	附属小学校	国語教育学
喜多川昭博	附属小学校	国語教育学

【平成22年度】

氏名	所属	専門分野
福田 景道	言語文化教育講座	日本文学
足立 悦男	言語文化教育講座	国語教育学
高瀬 彰典	言語文化教育講座	英文学
福田 哲之	言語文化教育講座	書道・書論
竹田 健二	言語文化教育講座	漢文学
林 高宣	言語文化教育講座	英語学
大谷みどり	言語文化教育講座	英語教育学
田中 俊男	言語文化教育講座	日本文学
縄田 裕幸	言語文化教育講座	英語学
百留 康晴	言語文化教育講座	日本語学
猫田 英伸	言語文化教育講座	英語教育学
富安 慎吾	初等教育開発講座	国語教育学
川井 史生	附属中学校	国語教育学
林原 公子	附属中学校	国語教育学
籠橋 剛	附属中学校	国語教育学
小澤 正則	附属中学校	英語教育学
高田 純子	附属中学校	英語教育学
須田 香織	附属中学校	英語教育学

錦織麻里子	附属中学校	英語教育学
藤原 さり	附属小学校	国語教育学
中村 紀恵	附属小学校	国語教育学
喜多川昭博	附属小学校	国語教育学

6 本特集号について

プロジェクトの5年目の報告を兼ねて、本誌『島根大学教育学部紀要』第44巻別冊「言語コミュニケーションと教育」特集号刊行を企画した。所収の論説は、以下の8編である。

①縄田裕幸：理論言語学は言語教育にいかなる貢献をなしうるか—生成文法理論と英語教育の場合—

②林 高宣：論文指導と文法教育—until節に生起する動詞と現在完了をめぐって—

③猫田英伸：新学習指導要領と英語教育のこれから—初等・中等教育を見通して—

④大谷みどり：小学校外国語活動とコミュニケーション能力に関する一考察

⑤富安慎吾：文学教材における読みの可能性についての検討—立松和平「海のいのち／海の命」の場合—

⑥百留康晴：国語の授業と日本語文法

⑦福田景道：言語コミュニケーションと日本古典文学史教育

⑧田中俊男：「正しく美しい言葉」から遠く離れて—国語教科書の三十年—

このように、本プロジェクトの主旨に応じて、国語と英語、大学と小中学校、理論と実践の連関が全体として志向されていると言える。

たとえば、小学校から大学までの言語教育活動の一貫性・相補性を検証するという目標に即して、初等教育（①③④⑤）、中等教育（①③⑧）、高等教育（②⑥⑦）のそれぞれについて、他の段階の教育との関係を踏まえて考察されている。また、それぞれの段階の文法教育を分析する諸論（①②⑥）、各学校種の教材を対象とする論考（⑤⑧）、コミュニケーションへの注目（④⑦）などは、島根大学言語教育研究会の研究発表とも相互に関連しつつプロジェクトの目的達成に寄与すると考えられる。

（福田景道）